

本論は、中国南部の犬肉食現象を取り上げ、そこでみられる人と犬の関係を、民族誌的に描こうとするものである。牧畜民の末裔となる筆者にとって、家畜の範疇から遠く離れた地平にある犬は、放牧の手伝いだけでなく主を守るまさに人間の友でもある。犬肉食は筆者にとって一種のタブーのようなものである。しかし、そのようなタブーを破ったのは、故郷から三〇〇〇キロも離れる南の国、広西チワン自治区であった。自らの犬肉食という経験を踏まえつつ、その犬肉食を提供してくれた人びとにとって犬を愛することと犬を食することがどのように一体となつていのかを考えたい。

一 狗権か人権か

広西チワン族自治区(以下、広西)は歴史的に、ジェイムズ・C・スコットが「ゾミア」「スコットニ〇一三」と呼ん

だ地域にほぼ該当し、今日ここに中国最大の少数民族チワン族をはじめとする多くのシナ・チベット語族の人びとが暮らしており、自治区北部には少数民族が、南部には客家など漢族の人びとが多く分布する。

筆者がこれまで調査してきた新疆ウイグル自治区や青海チベット地域など内陸アジアに比べて、広西は食の禁忌が少ない。写真1は、広西南部の町、玉林市の青空市場で売られている様々な肉料理のための調味料である。右から順に、羊肉・豚肉・牛肉・猫肉・犬肉・蛇鶏猫スープを作るための調味料となる。どこからが家畜でどこからがペットなのか、その境界がいまいだが、諸々の動物の顔がここでイメージできる。

この地域の人びとがいろいろな動物を食べることはある程度知っていた。しかし、広西北部の凌雲県のあるホテルに泊まった時、朝食に犬肉スープが火鍋で出されたのには驚いた。その町では、ホテルだけではなく、庶民が朝食を



写真1 市で売られるさまざまな肉料理用の調味料

食べるため利用する普通の店でも料理のベースとして、犬骨のスープか豚骨のスープが選ばれるようになってい

る。この地域だけではなく、広西の多くの地域において日常食として犬肉が食されている¹。その中でも、玉林市（総人口は七二四万人であり、漢族が九九パーセントを占める）は、毎年夏至に開かれる犬肉を喰う祭りでその名を国内外に知られている。

毎年夏至に開かれる犬肉を喰う祭りは「ライチ狗肉節」とも呼ばれている。犬肉祭では一万匹もの犬が屠られ食されるという。犬肉祭は玉林市の代名詞となり、夏至に近づくとも国の内外から多くの動物愛護団体や犬肉愛好家たちが、玉林市に殺到する。犬肉祭期間、治安維持のため警察も出勤するほど玉林市は賑わう。飲食店・ホテル・タクシー業界、周辺地域の関連部門に多大な経済効果をもたらす²（寧二〇一五）。

他方、動物愛護団体と犬肉愛好家の間で犬肉食の是非をめぐってバトルも繰り広げられ、前者は犬にも生きる権利があること（狗権）、後者は保護対象ではない犬を食べる権利は人間にあること（人権）を主張する。両者の間で暴力的な衝突が発生し刑事事件に発展することもある。さらに、欧米諸国は、文明国家として犬肉祭という野蛮な行いを黙認しているのだ、と中国を譴責する。中国政府は、もとより犬肉祭は外交問題ではないと指摘しつつ、犬肉祭は

地方行政主体主義のものでもなく、民間の慣習に過ぎず、愛護団体の過激な抗議活動の背後には反中勢力の政治的な謀略がある、と反撃する。

犬肉祭は、地域に経済効果をもたらすだけではなく、人権か狗権かをめぐる国家間のせめぎあい、イデオロギー間の衝突など、さまざまな政治的な葛藤を惹き起こす存在である。では、犬肉祭はどのように生まれ、その性格はいかに理解されるべきだろうか。

犬肉祭をめぐる議論においては、祭り自体は、一部の犬肉提供者や飲食業者が利益追求のために、市場原理に基づき犬肉の産業化を狙って、二〇〇九年頃から人為的に創り出した伝統だ、と祭りの構築性が強調される傾向がみられる。そこで、犬肉愛好家は、ヒューマニズムから派生した人間中心主義や功利主義の観念に囚われているからこそ、自らの欲望を満たすため犬の尊厳（狗権）を踏み躪り、犬を食材としかみなさない、と批判される。その一方で、愛護団体は、人間中心主義に対する反省から生まれたポストヒューマニズムの立場をとるため、犬を伴侶とみなし、玉林市で犬の解放運動に携わっているとして高く位置付けられている〔白二〇一五〕。

やや狗権擁護的になりつつあるこれらの議論から犬肉祭は、あくまでもさまざまなイデオロギーの持ち主（主体）の実践の結果（客体）として描かれがちであることがわか

る。人間中心主義（人権）にしても、ポストヒューマニズム（狗権）にしても、いずれも西洋発のイデオロギーだとすれば、犬肉祭においてみられるさまざまな政治的な葛藤は、中国における西洋イデオロギー間の代理戦争に過ぎない、ということになるだろう。

しかし、一九九〇年代から二〇〇〇年代初頭まで中国においては、研究者も含む社会全体として、犬肉の優秀さを賛美し、国民の健康を促進するため食用犬の多頭飼育や新興産業としての養犬業の可能性を科学的に見出そうとする傾向が強かった〔劉一九九四・四〇、何一九九五、趙一九九九、全二〇〇一、王・王二〇〇六〕。つまり、犬肉が食されているのは、美味しいのみならず、健康にも良いからだというものである。『本草綱目』に代表される伝統医学では、犬肉は、その性質が暖かいため、五臓をリラックスさせ、骨髄を満たし、補腎壯陽の機能がある、と高く評価されていた。近代栄養学でも、犬肉はタンパク質が高く、脂肪質には不飽和脂肪酸が多く、コレステロールが少ないため、動脈硬化や高血圧に予防効果がある、と肯定されている。こうした肯定的な評価を無視する狗権重視の愛護団体にとって犬肉祭は「玉林大虐殺」にほかならず、「悪魔」の玉林人とは商売せず結婚もしない、酷い目にあっても助けない、と玉林人の人間性を全否定する〔池二〇一四〕。

犬肉食をめぐるこれらの応酬の背景には確かにイデオロ

ギー的な要素もあろう。だが、犬肉食を祭りに化したこと、人間と犬の関わり合いを、本質に相いれない「種」と「種」の二者択一的なものにしてしまったのが、「犬肉祭」である。

二 「犬は伴侶であり食材である」というテーゼ

犬肉祭は、二つのたぐいの人間を作り出し、相互に対立させたと言えるだろう。しかし、両者を同じ国の市民として団結させるべく、国家は動き出す。

玉林市の犬肉祭をめぐる国内論争の激化を防ぎ、二分された市民の双方に理解を示し、その団結を試みたのが、「狗既是伴侶也是食材（犬は伴侶であり食材である）」という中央政府の公式見解とみることができる新聞記事である。二〇一四年六月二十三日、中国共産党中央委員会の機関紙「人民日報」に掲載されたこの記事によって、犬肉祭をめぐる問題の性質が規定されたのである。

それによると、一方で、犬肉食に反対するのはその人の言論の自由であるが、他人が犬肉を食することを暴力で干渉してはならない。他方、犬肉を食するのは慣習なので理解するべきだが、犬を虐待することは人間性に反する。立場が異なるからといって、自分の主張を相手に押し付けたら、相手を貶したりすべきではなく、共通点を見出すべき

だという。ここでいう「伴侶」とは愛護団体、「食材」とは犬肉愛好家が依拠する論理に対して、それぞれ示された理解である。

中央集権国家にとって、自国民の多様性をそのまま承認することは珍しい。ここでは、犬肉祭における異なる立場にある国民同士の拮抗の在り方を問題にしているのである。犬肉食自体の良し悪しを問題にしているわけではない。

他方、犬肉祭をめぐる諸々の紛争問題を抱える玉林市人民政府は、市当局と祭りとの関係を明らかにすべく、二〇一四年六月六日に声明文を発表した。声明文は、まず「近年、玉林地域において少数の市民が夏至の日に集まって犬肉とライチを食していたのが徐々に慣習化した」と認めつつ、しかしいわゆる「ライチ狗肉節」というのは、あくまでも一部の店舗や民間の呼び方に過ぎず、正式にそのような祭りはないときっぱり否定し、さらに「いかなる地方政府や社会組織もこのようなイベントを組織したことはなかった」と祭りとは無関係だと断じた。この行政府の見解に従うと、そもそも犬肉祭という形式のイベントは、正式には一度も存在したことがなかったということになる¹²。

そして、玉林市の行政府は愛護団体に配慮すべく、地方公務員には祭りの前後一カ月以内、公に犬肉を食べないこ

と、犬肉提供者には公に犬を屠らないこと、飲食業者には店の看板やメニューに漢字「狗」を明示しないことを要請し、一連の妥協を引き出した。これは、愛護団体が勝ち取った一種の闘争の成果だと言えよう。しかし、制度的に認められた犬肉祭が存在したことがなかったということは、それがそもそも禁止の対象にもならないということでもある。また、妥協の産物として看板から「狗」がなくなつたとしても、店内から狗肉がなくなっていないことは明白であり、その犬肉を目当てに多くの犬肉愛好家が相変わらず玉林市に殺到している。このように、犬肉祭をめぐる一連の文脈で、異なる立場の人間同士の「対立」だけではなく、さまざまな駆け引きの末に生じる「妥協」もみえてくる。

犬肉祭で実質的な恩恵を受けることのない多くの一般住民にとつて、外部から殺到する犬肉愛好家や愛護団体の存在は、日常生活上迷惑であり、とくに両者の対立に巻き込まれ、玉林人であるだけで「悪魔」と貶されることは心外でもあるだろう。ただ、犬肉祭という在り方には必ずしも同調できないものの、彼らは決して犬肉食そのものを拒否しているわけでもない。

前節の冒頭に私は、広西北部の凌雲県とあるホテルで朝食として犬の肉スープと出会ったことを報告した。しかし、その時に犬肉を口にするとはどうしてもできなかった。

た。犬肉を嚙下したのは、玉林市であった。筆者は、玉林市の南に位置する博白県生まれの友人D氏の故郷で犬肉食について調査させてもらうことになった。犬肉食を研究するなら「人類学者としてまず自らそれを食べなきゃ」というのが若い社会学者たる彼の最初の提案だった。そして、私の胃袋を慣らすため、自治区の中心地南寧市から博白県に向かう道中必ず経由する玉林市で、我々は犬肉の専門店に入った。D氏は言った。「店の人には絶対に犬肉祭の名前を持ち出さないこと。カメラもなるべく使わないこと」。時は八月、いわゆる犬肉祭の二カ月後だったにもかかわらず、もしかしたら愛護団体の者ではないかと、外部から来た人間に対する店の警戒心が依然強いからである。

店とはいっても、店内ではなく、店と道路の間に設置されたテーブルを囲んで食べるのが一般的である。このように道端にずらりと並ぶテーブルで構成された屋台のことを中国語で「大排档ディンテ」という。道路を歩く人や走る車の中からでも、犬肉の匂いを感じ、食べている人間が見える。人に見られる中で食べることは、それなりに覚悟が必要であり、非日常的であろう。半ば演技しているような環境に慣れなかったせい、あるいは調味料が多すぎたせい、出されたこげ茶色の犬肉は、これといった特別な匂いはせず、肉質が硬く、味は何とも表現しにくく、あえて言うなら年取った雄鶏の肉のような感じだった。犬肉祭の現場で

犬肉を食べたことで、筆者は、犬肉そのものがどうであったかというよりも、とにかく何か非日常的なシンボリックな行為を成し遂げたというような感覚を覚えた。

三 愛しそして喰う

私とD氏の最終目的地は、玉林市から南へ六〇キロ離れる彼の故郷博白県であった。世界で最大の客家（客家語を話す人々の総称）人口を有する県として知られている博白県は、玉林市の管轄下にあり、二〇一六年現在、総人口は百八十九万人であった。客家たちの間では、犬肉食をめぐって次のようなことわざがある。「夏至狗、食矣満山走」。夏至の日に犬肉さえ食べてしまえば、たとえ野山を走り回ったとしても疲れることはない、という意味である。犬肉食文化の担い手ともいわれる博白県民の多くは犬肉祭の在り方に違和感をもつ。だが、現金収入のため犬肉祭の際に犬と屠畜者を提供するなど、博白県は一種の犬肉食文化の拠点的な役割も果たしている。

私とD氏は、正午、彼の実家が位置するX村に着いた。一四時ころ、上半身裸の長身の男がタバコを吸いながら、首輪のついた犬を連れて我々のところに近づいてきた。その落ち着いた淡々とした表情からは犬の散歩をしているようにしかみえなかった。しかし彼（A氏と仮称）は、D氏の

実家の前に止まっていた三輪車のトランクに犬の首輪の紐を縛りはじめた。三分も経たないうちにD氏の実家の納屋にいたと思われる、小柄な男（B氏）が木製の野球バットのようなものをもってきて、いきなりその犬の頭を猛打した。文字通りの撲殺である。おそらく頭蓋骨の破片だと思われる白いものが飛び散るくらい強く撃たれた犬は、奇声をあげながら抵抗し、なかなか倒れることはなかった。

そこで、飼い主のA氏は、どこからか長さ三、四メートルの金属製のはさみをもってきて、犬の首を締めた。すると、犬は、前の両足ではさみを何とかして開けようとして抵抗しているうちに、その声が小さくなっていった。その瞬間を狙って、B氏は棒でさらに猛打した。犬の体は泥のように崩れゆき、動かなくなった。B氏は犬の喉にナイフでとどめを刺し、放血した。この過程は一〇分くらいのことだったと記憶する。それから二人は犬の死体を、D氏の実家の裏庭に連れていくと、そこで、D氏の兄（C氏）が台ばかりの前に待っていた。上半身裸でかつA氏と同じ体形のC氏は、重量を測ってから犬の代金をA氏に渡した。それからA氏は自宅に戻るかと思いきや、B、C両氏と一緒に犬をD氏の実家の前庭に連れていき、そこで解体作業も手伝っていた。

犬を熱湯に丸ごと入れて、その体毛を筆取り取ってから、解体と内臓処理までの作業は主にB氏を中心に行われ、子

どもたちも大勢来て、作業を見たり、いたずらしながら遊んだりして、全体の雰囲気は、とても屠畜の現場には思えないくらい賑わった、楽しいものだった。犬は血生臭いと言われるが、草食動物の家畜と違って胃袋が少ないためか、解体されても臭くなかった。触ってみると、皮は草食系の家畜より柔らかくて薄い。そのため、ガスバーナーでパリパリになる程度に焼くだけで、鍋に入れて調理することができ、食感にメリハリをもたらすので、パリパリに焼かれた皮があらゆるところに行きわたるように、肉を切り分ける必要がある。

前庭に建てられたかまどで犬肉を調理し、そしてそこで食事をした。調味料として使われているのは、近くの山から採ってきた山菜などだった。最初のスープは捨てられ、食されるのは二回目以降のスープである。調理された料理は三種だった。一つ日は、蒸して薄切りにした犬肉をたれである棒棒鶏のような、^{ハイチユ}白切というものだ。二つ日は、汁気の少ない鍋料理の幹鍋^{カンシツ}だった。最後は、野菜と犬肉と犬の足をベースにした鍋だった(写真2)。

村人たちはいくつかのグループに分けられて、数回にわたって招かれ、夜になるとほぼすべての世帯が招待されたようだ。参加者全員に行きわたるよう配慮されるのはパリの皮だけではなく、部位として足の指や肉球なども重要視されていた。筆者も足の指を分けてもらい、表面に

ついている肉を食べてから、骨を捨てた。隣にいたD氏は、頭を横に振りながら筆者のかじり方はもったいないという。人びとはコーラーゲンを吸収するように、最後の最後まで大事にかじり、子どもたちは帰宅の道を歩きながららじっていた(写真3)。

玉林市の屋台で食べたときに比べて、味は、あっさりしていておいしい。食感としては特別なものであった。経験したことはないが、おそらく肉に近いのではないかと思わせたり³、子羊肉を食べているような感じもしたりする。何よりも食卓を囲んで食事している際に誰かにみられることなく、落ち着いた和やかな雰囲気だった。飼い主のA氏も宴会の最後まで骨をかじっていた。

A氏は飼い主として、屠ること、解体すること、食することなどに最後までかかわっていた。それは何匹も子犬を産んでくれたからもう売ってもよく、得たお金でその子犬たちを養うのだ、という判断によるものであった。A氏は自分の犬を売るが、その子犬を大切にしている。

既述したように二〇〇〇年代初頭まで中国では、食肉産業への貢献が期待され、家畜としての犬の多頭飼育についての研究が盛んだった。しかし、失敗のケースが圧倒的に多く報告されてきた「王ほか一九九六、馬一九九九」。博白県も同様だった。屠畜の名人であるB氏の父も犬の多頭飼育を数回試みたが、ストレスや病気感染症ですべての犬を失



写真2 鍋料理のベースになる犬の足



写真3 犬の指をかじりながら帰路につく村人

い、破産寸前だったという。現在、博白県で食べられるのは「土狗」と呼ばれる地元産の犬である⁴。これは、犬肉祭の時に食される商品としての犬とは異なる。

B氏一家は、犬の多頭飼育に失敗してから、現在、猛毒の蛇の養殖に励んでいる。漢方薬としてのニーズが高く、蛇養殖事業はかなりうまくいっているようだ。蛇が金になるため盗まれる可能性も高い。蛇養殖場を昼夜問わず警備しているのは、ドイツから輸入した大型の番犬であった。財産である蛇を盗難から守ってくれている二匹のたくましい番犬は、B氏にとつて、誰よりも信頼のおける友である(写真4)。

犬肉食文化の担い手とされる博白県の人びとにとつて、犬は日常生活を営む上で不可欠な友であると同時に食べる対象でもある。犬を愛しかつ喰う人びとが経験することのうなりアリティは、凶らずも「犬は伴侶であり食材である」という表現によつて、最も適切に言い表されている。そもそも、種間対立的な考え方に基づく狗権か人権かの議論がない地域において「犬は伴侶であり食材である」ことは自明の理だからである。

四 狗権でも人権でもない

本論の前半で紹介したように、犬肉祭をめぐる、犬と

いう「種」を愛すべきか、殺して食すべきかという全く異なる立場をとる、二つのたぐいの人間(国民)が存在することが分かる。後半で紹介したのは、犬を愛しつづ喰うという人びと、相反するように見える二つの行為をとる、一つのたぐいの人間(村人)である。

玉林市の犬肉祭をめぐるのは、狗権か人権かという「種」の戦いがあった。一方、愛護団体は、犬肉愛好家そして場合によつては玉林の人間全体を人倫に反する非人間、悪魔だとまで貶し、狗権を主張する。他方、犬肉愛好家は、法律的に犬は保護対象ではなく、人間にはそれを食べる権利があるとして、人権を主張する。敵対しあう国民を統合しようとしたのが、「犬は伴侶であり食材である」という「人民日報」のテーゼであった。

犬肉祭の愛護団体とも犬肉愛好家とも違って、博白県の人びとは、犬を愛してかつそれを食べる。「愛」と「食」の行為は、人間と犬の間で、不断に繰り返されている。二つの行為は連続し、循環する。この事態を「人民日報」は、想定していなかっただろう。しかし、「犬は伴侶であり食材である」という命題は凶らずも博白県における「ともに生きる」という人犬関係の在り方を肯定することになった。

狗権か人権か、伴侶か食材かといった二者択一的な論争を招来しがちな玉林市の犬肉祭は、中央と地方行政の影



写真4 蛇養殖場を警備しているB氏の二匹の番犬

響を受けつつ、妥協をみせながら持続している。控えめになりつつある犬肉祭の在り方は、X村における人と犬の關係への回帰であるようにもみえる。

註

1 チワン族の場合、特に老人たちは犬肉を食べない人も多い〔陳・領一九九二〕。

2 実際、二〇〇八年に玉林市文化局が編纂した、『玉林の無形文化遺産申請に関わる資料集』中には、「ライチ狗肉節」が項目として挙げられていた〔夏二〇一七・一〇〇〕。この事実から、犬肉祭を市当局は何らかの形で後押ししていたのではないかと指摘される。

3 山田は、諸研究を踏まえながら、犬肉と人肉の関連性を指摘した〔山田二〇一八・四五―四七〕。

4 博白県では、例えば、アヒルや豚などの家畜がいなくなったら飼い主は懸命に探したり、場合によっては警察に届けを出したりもするが、犬の場合はそういうことはしない。犬がいなくなったら、それはおそらく他の村の境界を侵犯し、誰かに喰われただろうと断念する。その代わりに、他村の犬が来たら同じく屠って喰っても構わないようだ。

引用文献

池墨「愛狗者吃狗者都應該尋找平衡点」〔中国商報〕二〇一四年六月

- 二十七日)
王璇璇・王斯亮「解析狗肉食法的傳承與異化」(揚州大學烹任學報) 十一—十四、二〇〇六年)
王華、何光中、黃波「犬的育肥飼育試驗」(貴州畜牧獸醫) 二十—二十三、一九九六年)
何明福「肉犬的飼育技術」(貴州畜牧獸醫) 十九(一)：三十四—三十六、一九九五年)
夏循祥「狗肉好吃名聲丑」…民俗遺產化的價值衝突——以玉林、荔枝狗肉節為中心的討論」(文化遺產) 五：九五—一〇二、二〇一七年)
スコット、C.ジエームズ「ソミア——脱国家の世界史」(佐藤仁監訳、みすず書房、二〇一三年)
全炳昭「養犬業是一門新興高効産業」(農村發展論叢) 五(六)：三十三、二〇〇一年)
陳文・領博「壯族石狗考略——兼談壯族先民的凶騰及共演變」(廣西民族研究) 二：七〇—七六、一九九二年)
趙從民「狗肉開發經濟價值高」(湖北畜牧獸醫) 三：二二—二六、一九九九年)
張揚「淺談狗肉養殖」(農村養殖技術) 十三：三三五、二〇〇二)
寧新春「狗肉節、爭議造就營銷奇跡」(東莞日報) 二〇一五年六月二十四日)
白如彬「人道與功利・合法性與效率機制下的狗肉節衝突行為原因分析」(宜賓學院學報) 五：九二—九九、二〇一五年)
馬洪「養肉狗并非易事」(農村養殖技術) 八：十六、一九九九年)
山田仁史「いかもの喰い——犬・土・人の食と信仰」(華紀書房、二〇一七年)
劉延年「肉食狗的飼育與狗肉加工技術」(中國畜牧雜誌) 三〇(四)：四〇、一九九四年)





9784750515793



1920010014004

ISBN978-4-7505-1579-3

C0010 ¥1400E

定価(本体 1400 円 + 税)

亜紀書房



人間の「外から」人間を考える
ポストヒューマニティーズ誌

たぐい

たぐい

特集1

喰うこと、喰われること

特集2

フィールドから

マルチスピーシーズ人類学の現在

vol.1

奥野克巳

シンジルト

近藤祉秋

東千茅

石倉敏明

上妻世海

近藤宏

逆巻じとね

椎名登尋

辻村伸雄

山田仁史

Natasha Fijn

